

夜戦の美学

水羊羹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——私の全てを、あなたに捧げます。

Twitter企画の参加作品です。

縛り内容

原作：艦隊これくしょん

テーマ：美学（原作が艦隊これくしょんのため、なくても良い）

文字数：一話3000以下の、最大三話まで。

目次

己の美学を曲げない艦娘	1
あなたに捧げる私の美学	6

己の美学を曲げない艦娘

我が鎮守府には、困った艦娘がいる。

己の美学とでも言うべきものを曲げられない、頑固な艦娘が。

そんな手にかかる彼女が、今日もボロボロの状態で報告にきた。

「提督ー。第二艦隊、全員無事に帰還したよ！」

「はあ……。あのなあ、お前。自分の格好をってみろ」

「ん？ いつも通りだけど？」

「ああ、そうだな。いつも通り、大破に近い中破をしているな！」

「沈んでないんだからいいじゃん！」

カラツと笑う彼女は、川内型一番艦の川内だ。他の鎮守府の川内と同じように、夜戦大好きっ子。

三度の飯より夜戦好き。何度言い聞かせても、夜戦をやめてくれないのだ。

「我が鎮守府の決まりを言ってみろ」

「中破撤退！」

「川内が夜戦した時は、破損状態はどうだった？」

「小破に近い中破だったよ」

「撤退しろよ!!」

「えー!? なんでよー！ 夜戦だよーせーん！ 深海棲艦をあとちよつとまで追い詰めていたんだから、夜戦するしかないっしょ！」

「おバカ！ それで轟沈したら意味ないだろっ！」

「ぶーぶー！ 私がそんなへまをするとか思ってるの？」

「それはまあ、思っていないけどさ。それでも心配するのが提督つてもものなんだよ」

実際、うちの川内は提督界でも有名だ。大規模な作戦任務の時でも、彼女は自ら進んで前線にその身を晒していた。無謀とも取れるその姿を見て、提督達はこう呼んでいるのだ。皮肉を込めて。

——死にたがりの、夜戦バカと。

本来ならば怖がる夜戦を笑って望み、夜の海を軽やかに駆け、戸惑う深海棲艦を血祭りに上げていく。

耐性のない駆逐艦などは、川内に恐怖を抱いているぐらいだ。

その姿が悪鬼と見間違うばかりに。

「あはは、提督は心配性だなー。大丈夫だって！ 私には神通や那珂がいるし、他にも頼りになる仲間がいるからさ」

「でも、お前が夜戦する時、みんなを帰還させようとするって聞いたぞ？」

「それは、ほら。私の美学にみんなを巻き込むわけにはいかないし？」
「あのなあ。今まではなんとかなっているからいいけど、いつなにか起こるかわからないのが海なんだぞ？ それはお前もよく知っているよな？ 他のみんなを帰す前に、その美学を捨てて夜戦はやめてくれ」

「——それは無理だよ」

執務室に響き渡る、鋼の言葉。常の快活な笑顔を潜めた川内は、ここは譲れないとこちらを睨んできていた。

けれども、流石にこれ以上は見過ごせない。艦娘の命を預かる提督として、なにより一人の人間として、川内の寿命を縮めかねない行動は止めてみせる。

「俺だって無理だ。このままだと、川内が轟沈しちゃう。今まではお願いという形で止めてたけど、これからは命令してでも止めるぞ！」
「それでも、私は夜戦をやめない。だって、夜戦こそが私の存在意義だから」

「そんなのを存在意義にするな！ 俺はお前を心配しているんだよ！
同じ艦隊の艦娘達も、川内が沈まないか心配している。なあ、お願いだよ。頼むから、夜戦するのをやめてくれ」
懇願するが、川内の瞳は揺れない。芯に鋼があるかのように、決して曲がらない、折れない、翻さない。

例え、その身を凌辱されようとも、自分の誇りを汚されようとも、その結果死ぬことになっても、己の意見を変えることはない眼差しだった。

頭を掻きむしる。どうして、どうしてわかってくれないんだ。ただ夜戦をやめて欲しいと言っているだけなのに。

なにも、ずっと封じるつもりはない。どうしても夜戦をしなければならぬ戦いが出てくるだろうし、その時は川内に許可を出すつもりだ。

川内自身もそれを理解していると確信している。彼女はわかっている上で、こちらのお断りを断っている。

「ごめんね、提督。何度言われても、私の考えは変わらない。私は、夜戦を……ううん、自分の美学を曲げるつもりはないから」

「——勝手にしろっ！ もう、勝手にして轟沈でもなんでもしてしまえ！」

「……ごめんね」

困ったように笑った川内が、執務室を退室した。

扉が閉まるのを確認してから、己のやり切れなさに拳を机に叩きつける。

なにか、提督だ。川内の上司だ。艦娘を指揮する人間だ。艦娘の考え一つ変えられず、ましてや会話を放棄してしまう始末。

悔しい。感情を制御できない矮小さが。

悔しい。艦娘に提督として命令できない小心者さが。

悔しい——それを見透かされた上で、川内に謝らせてしまった自分の情けなさが。

「くそっ！」

唇を強く噛む。血が滲んで、口内に鉄の味が広がっていく。

それも、自身を苛立たせる要因でしかない。己の惨めさが突きつけられた気がして。

天井を仰いで瞑目。微かに聞こえる艦娘の声を材料に、気持ちを落ち着かせる。

錬成された穏やかな心を使い、ため息とともにイライラを吐き出す。

鼻腔を血の匂いが突いた。

「川内は入渠中だろうな。……いま会うのはお互い気まずいだろうし、明日謝ろう」

果たして、それは正しい選択なのか。彼女から逃げているだけでは

ないのか。

自問自答するも、答えは出ない。ただ、自分にとって都合の良い時間が欲しいだけ。

それが逃げと言うなら、そうなのだろう。

もう一度ため息を漏らしながら、ままならない思いに憂鬱になるのだった。

——川内が、轟沈直前で帰ってきた。

その報告は、泣きながら帰還した神通よりもたらされる。

慌てて川内の元に向かうと、ちょうど彼女が入渠施設に入ろうとしているところだった。

「あ、提督。その、あはは。しくつちやった。ごめんね」

「バカやろうッ!!!」

まさか、怒鳴るとは思わなかったのだろう。ヘラヘラした笑いの川内の片目が、大きく開かれる。

もう片方の目は、潰れて肉が剥き出しになっていた。

「本当にお前は……お前はっ!」

「あつはっは。でも、昨日提督は勝手にしろって言ったじゃん。だから、私はその通りにしただけだし」

「あれは、俺が悪かった。つい、心にもないことを言ってしまった。でも、やっぱり轟沈しかけたじゃないかっ!」

「大丈夫だいじょうぶ。今回はちよつとミスっただけだから。次からは失敗しないって! だからさ、提督。また夜戦させてね?」

「——っ!」

提督としての、タカが外れた気がした。

川内の上司としてではなく、一人の人間俺として、彼女の頬をぶつ。

叩かれた頬を押さえた川内は、ぼかんと間抜けに口を半開き。その滑稽な姿がおかしく、それ以上に腹立たしくて仕方がない。

「……なんで?」

返事の代わりに、彼女の全身を強く抱き締めた。

指先から、焼けただれた皮膚の感触。あまりにも痛々しく、涙が出てきそうだ。

直ぐにでも、川内を入渠させなければいけない。そうわかっているけれど、今だけはこの温もりを感じていたかった。

「お願いだ……これ以上、俺を心配させないでくれ。夜戦はしてもいい。いいから、せめて中破したら撤退してくれ。頼む」

「……心配してくれて、ありがとう。うん、流石に少し懲りたよ。中破で夜戦するのは、やめるね」

「そうか。ようやく、わかってくれたか」
「でも、ね」

そこで言葉を区切ると、身体を離して微笑む川内。流していた涙を拭いながら、彼女は高らかに告げる。

「夜戦だけは、やめるつもりはないから」

「……わかったよ。中破進軍しないなら、それでいい」

「よろしい。じゃ、私は入渠してくるから！」

施設に入る川内を見て、安堵の息。

とりあえず、少しだけ自分を見直してくれるようだ。

しかし、今後の問題に頭が痛い。このまま、その夜戦バカも少しは治れば良いのだが。

筋金入りの川内の美学とやらに、ため息をつくのだった。

あなたに捧げる私の美学

——昔から、夜戦好きな川内私が不思議だった。

違う鎮守府にいる私の話を聞くと、どの川内も夜戦バカという認識があるのだ。

変なの。最初に思うのは、そんな言葉。

だって、夜戦なんかしても楽しくない。

そりゃあ提督の命令には従うけど、わざわざ無理して夜戦までする義理はない。

夜戦をしているより、神通や那珂と話している方が楽しいし。

そんなことを演習で呟いたら、向こうの鎮守府にいた川内がおかしそうに笑った。

かつての己を見るような眼差しで、こう告げてきたんだ。

——心から支えたいと思う提督と会えば、わかるよ。

そんなあやふやな言葉で。

当然理解できなかつたから、私は首をかしげたわけだけども。

今なら……ううん、あの人と出逢ってからにはわかるかな。

あの人に会った瞬間から、私の存在意義は定まったんだから。

提督との相性が悪いと、定期的に別の鎮守府に異動されることがある。

私もそのクチで、新たな鎮守府にやってきた。

そして、あの人に出逢ったんだ。

「川内だな。うちの鎮守府では初めての艦娘だから、色々教わると思う。これから、よろしくな」

とくん。着任挨拶にきたあの人……提督を見て、私はたった一つの感情に支配された。

——この人を支えたい。

今までにないほどの、強い衝動。提督の笑顔が、声が、匂いが、私

を狂わせる。

一目惚れと言ったら、そうなのかも。でも、私はそんな清い感情だとは思えない。

これは、一言で表すならそう——崇拜。

提督のために、笑いたい。

提督のために、頑張りたい。

提督のために、勝利を捧げたい。

提督のために……夜戦をしたい。

ああ、ああ。

今なら、わかる。わかっってしまう。あの時言っていた別の私^{川内}の言葉が、記憶から呼び起こされる。

川内型は、川内は、真に仕える提督に出逢ったら、夜戦を捧げたくなるって。

だけれど、これを素直にぶつけることはしない。まだ初対面だしね。

心に苛烈な熱をしまい込みながら、私は快活な笑顔を向ける。

提督に余計な心配をかけさせないために。

「川内、参上。夜戦なら任せておいてー！」

こうして、私の美学^{夜戦}は始まったのだった。

——足りない。

提督の元に配属されてから、常に胸を掻き立てる渴望。

練度は上がった。周りとの連携も取れている。可愛い妹達もいるし、順風満帆だ。

でも、でも、違う。違うの。こんなの、私じゃない。こんなお行儀が良いのは、私^{川内}ではない。

なにが足りない……決まっている。夜戦、夜戦をこの身体が欲している。

今も夜戦はしている。だけれど、決まって小破以下で挑んでいる。

提督の方針で。

私達の身を案じているのは、とても嬉しい。

あの人は優しすぎるから、私達艦娘に命令ができないんだ。お願いという形で、協力を仰いでいる。

それが愛おしくて、支えたくて、夜戦を捧げたくて。

だからこそ、不満。私達が、中破進軍したら轟沈すると思われているように。

この鎮守府は強い。それは戦闘力という意味ではなく、優しい提督を支えようとする、艦娘達の献身が満ちているから。

水平線に、夕日が沈み込む。

その直前、仲間に向けて放たれた砲撃を庇い、私の左腕が破損。謝る仲間に微笑みながら、空から零れ落ちた闇の先を見つめる。

——数は二。どっちも軽巡洋艦で、小破と中破。対するこちら側は、私が中破で、他は小破のみ。

唇を舐める。

身体が火照っていく。収まらない熱が、心から飛び立っていく。やるしかない……そう、確信した。

「みんなは先に帰還しといて！」

呼び止める仲間を無視して、私は自身の理性をぶっ壊す。

全ての雑念を忘れ、溢れ出る思いを抱きながら、闇の海を疾駆。闇で蛍火が瞬き。直感で身を捻れば、すぐ側で熱が通り過ぎる。

背後から襲いくる水飛沫を浴びながら、私は口元に大きな弧を描く。

「さあ。私と夜戦しよー！」

我が身を焦がす、夜戦の焰。共に踊りましょう。提督に美しき夜戦を捧げるために。

この日、私は初めて中破状態で夜戦をしたのだった。

「うあー……」

入渠施設という名の湯船で、私は全身を投げ出していた。やらかした。今の心境は、その一言に尽きる。

中破状態で夜戦を始めてから、私はその魅力に病みつきになっていた。

提督の言葉を無視して、何度も何度も夜戦の日々。

時に危ない場面があつたけれども、こうして無事に帰還している。でも、今回は流石に不味かつた。

咄嗟に神通へ放たれた砲撃を庇つたはいいものの、まさかの大破。おかげで三途の川が見えたよ。まだ渡るつもりはないけど。

肝が冷えたかな。大破で夜戦はいくら私でも笑顔が固まる。

ただまあ、一つだけ言い訳はあるのだ。

敵は私達を逃がすつもりがなかったから、夜戦をせざるを得なかった。

これ幸いに倒しに飛び出た私もあれだけどさ。

「提督、泣いてたなあ」

叩かれた頬を撫でながら、私はため息をつく。

心配してくれたのだろう。普段は自信なさげな顔ばかりなのに、あの時はめちやくちや怖かつた。うん。

ごめんなさい。そんな思い以上に、とても嬉しくもあつた。

「私、愛されてるね」

口元がニヤける。だって、仕方ないじゃないか。あの提督から、怒鳴られてぶたれたんだから。

被虐趣味があるわけではない。ないけれど、私の性質上、痛みで生を実感してしまうのだ。

神通のように可愛くないし、那珂のように笑顔が素敵でもない。

私にあるのは、艦娘としての力だけ。だったら、それを活かすことこそが、提督にできる唯一の奉公。

——より美しく。

——より華麗に。

——そして、より苛烈に。

それこそが、私が夜戦に求める美学^{理想}。提督のために捧げる、私の存

在意義。

夜戦しか取り柄のない私には、それで十分。他の部分は、みんなが埋めてくれる。

「でも、次からは自重しなきゃね」

提督に泣かれちゃうし。

舌を出した私は、流れる涙をお湯で拭うのだった。

敵の戦艦が、崩れ落ちる。

海の藻屑となった残骸を見送り、肩を回しながら勝利の美酒に酔う。

夜目に慣れた目で辺りを見回せば、暗い中で喜ぶ仲間の姿が見える。

「ま、当然の結果ね」

自身は小破。仲間も夜戦で中破になった娘がいるみたいだけれど、戦艦相手にこれは大健闘だろう。

完全勝利とまではいかないでも、勝利と言っても問題ない。

「これなら提督も怒らないでしょ」

私は夜戦ができて嬉しい。提督は無事に帰ってくれて嬉しい。

どちらもハッピーな、幸せな結末だ。

まあ、私としては若干の物足りなさはあるけれど。

そんなことを思ったのが、フラグとかいうことだったのかも。

嫌な予感を感じた。気を引き締めて、跳躍。直後、私の背後が爆発した。

仲間達も違和感に気がつき、戦闘態勢を取る。

「戦闘音に誘われて来たのかな？」

夜戦している時に乱入するのは、よくあることだ。

艦娘の匂いでも感じているのか。それとも、ただ単に深海棲艦同士で情報を共有しているのか。やつらはふらふらとやってくるのだ。誘蛾灯に誘われる虫のように。

燃料確認、問題ない。弾薬も余裕がある、被弾状況も良好。気配を探る。敵は駆逐艦が三隻。魚雷に気をつければ、まず負けない。

心が震え上がる。恐怖で……否、提督に捧げる新たな獲物^{夜戦}がやってきたから。

いつものように、心の熱のままに身体を動かす。

「いくよー。」

歌おう、提督への愛を。奏でよう、己の美学に従うままに。笑おう、あの人に捧げられる夜戦に歓喜しながら。

高らかに叫ぶ、心の渴望に身を委ねて。暁の水平線に、勝利を刻むのだ。

——これがあなたに捧げる、私の美学^{夜戦}。